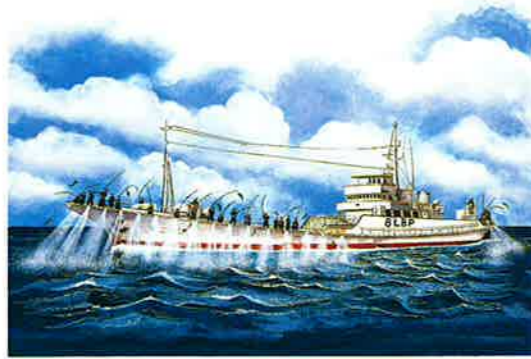
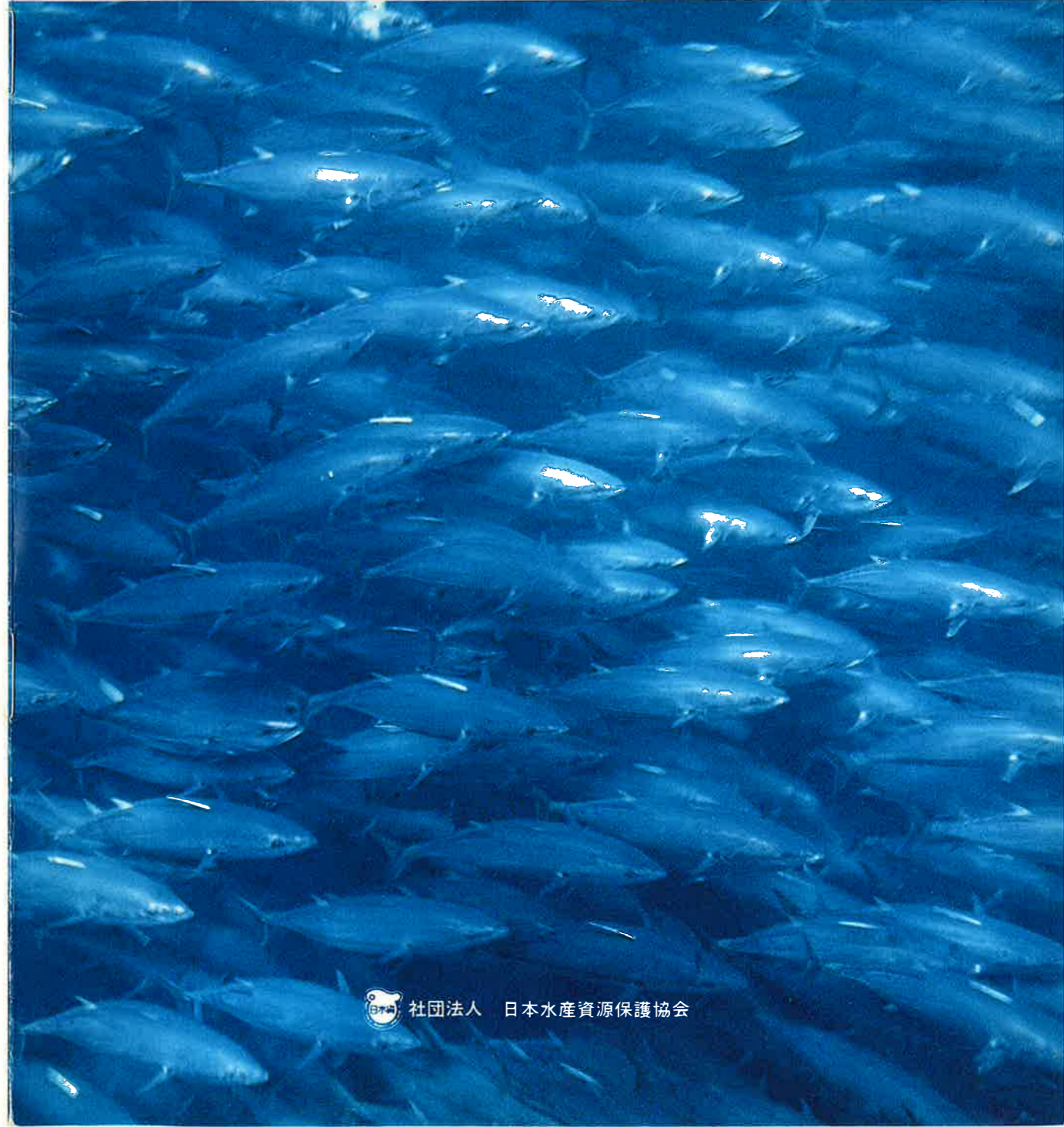


わが国の水産業

かつお



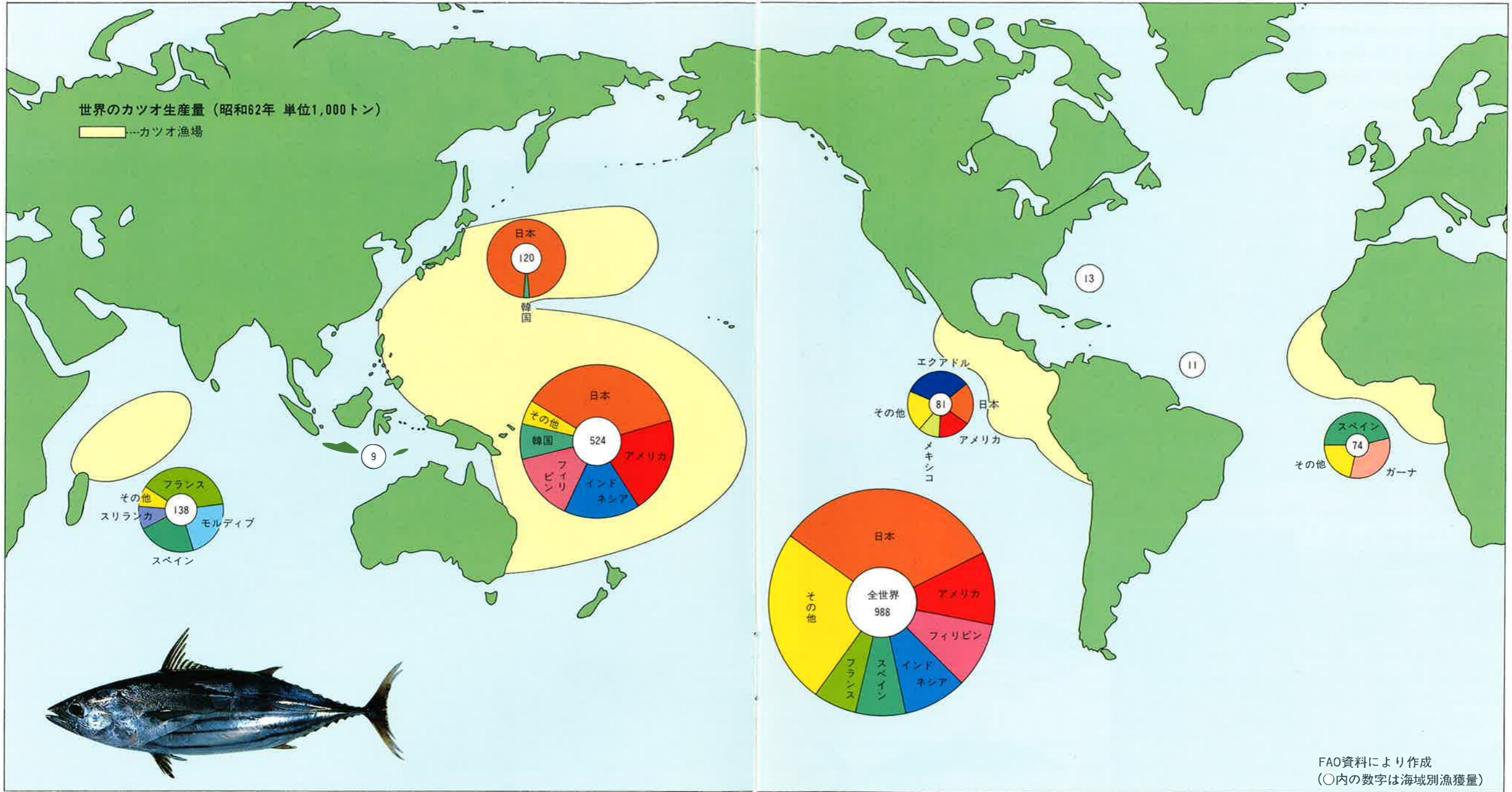
社団法人 日本水産資源保護協会
〒104 東京都中央区豊海町4番18号
東京水産ビル6階
電話(03)534-0681 (03)533-5401



社団法人 日本水産資源保護協会

世界のカツオ

カツオは季節の魚として、またかつお節として、日本人の生活に馴染んだ魚です。近年では漁場の拡大、冷凍技術の発達によって、一年中食べられるようになりました。カツオは資源に余裕のある数少ない魚の一つです。



一般にカツオという場合は、地方名でのマガツオやホンガツオを言いますが、日本ではこのほかにソウダガツオ、スマ(ヤイト)、ハガツオを含める時もあります。これらの分類は次のとおりです。本書ではスマ属のカツオについて書いています。

- サバ科
- スマ属 カツオ、スマ
 - ソウダガツオ属 ヒラソウダ、マルソウダ
 - ハガツオ属 ハガツオ
 - マグロ属 クロマグロ、メバチ、キハダ、……

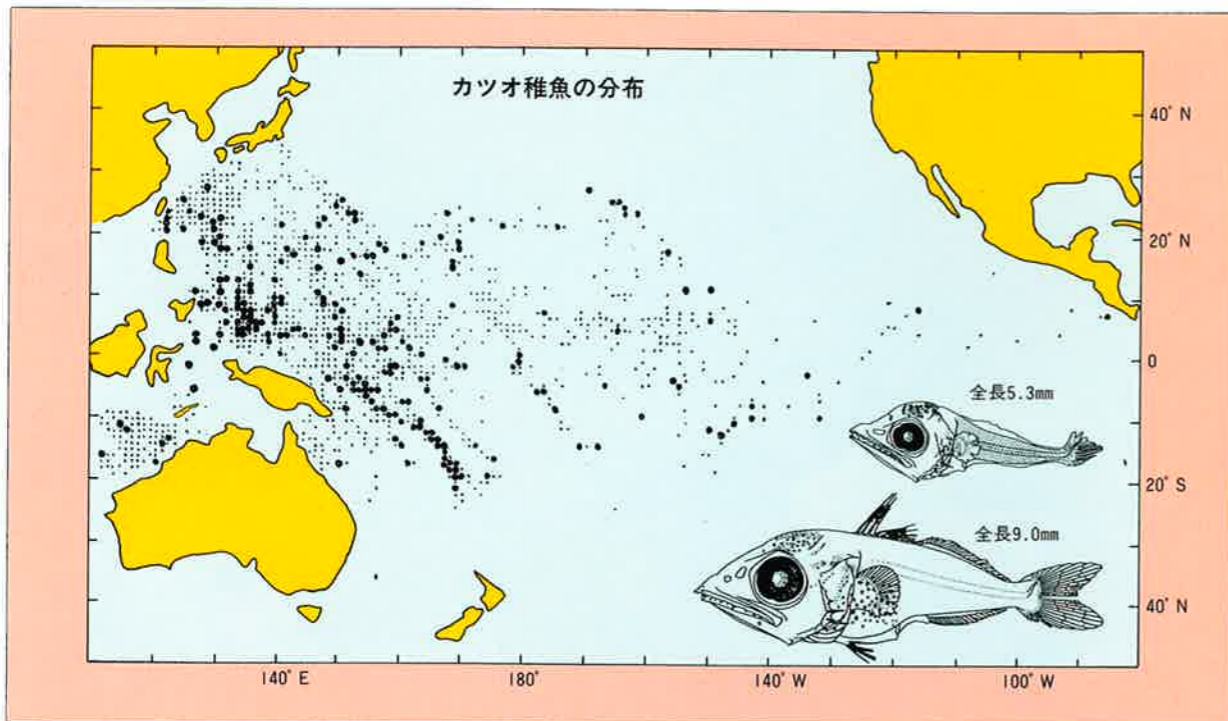
カツオは太平洋、インド洋、大西洋の20℃以上の暖かい海域に広く分布しています。世界の漁獲量は昭和62年のFAO統計では98.8万トンです。日本のカツオ漁獲量は世界一で33.1万トン(34%)、内訳は日本近海で11.9万トン、赤道海域で19.4万トンを漁獲しています。カツオを漁

獲する方法は、竿釣りときき網ですが、世界的にみると先進国はまき網型(大型船)、発展途上国は竿釣り型(小型船)、といえます。日本では伝統的な竿釣り型と近代的なまき網の両漁法があります。

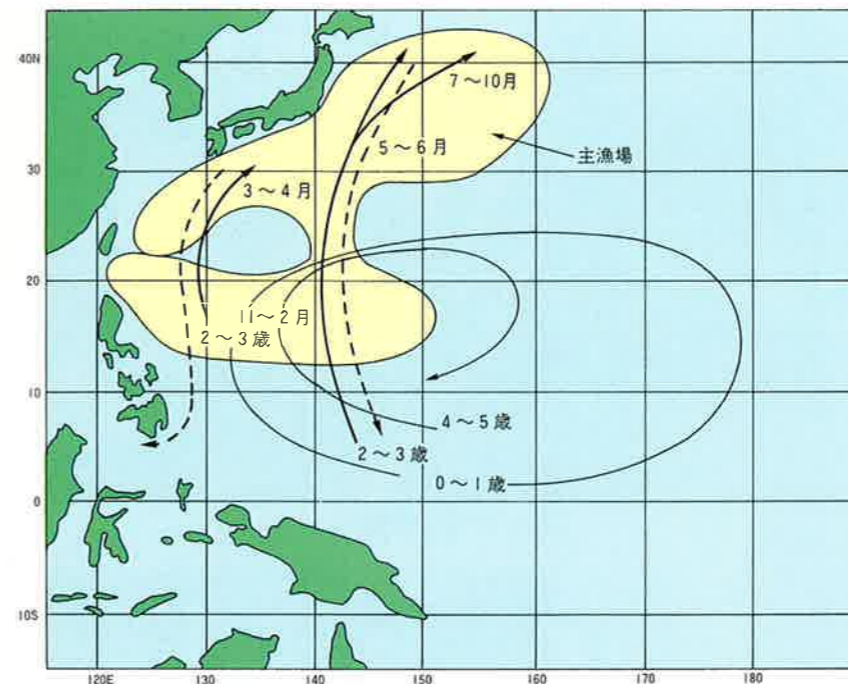
生態

カツオの寿命は7歳位ですが、3歳魚までは急速に成長します。体長が45cmを越えると成熟し始め、4歳魚以上は全て産卵に加わります。卵は直径約1mmの浮性卵で、1尾の雌は1産卵期に数十万から百万粒も産みます。2日ほど

で孵化しますが、5mm位の稚魚は頭でっかちの3等身で口や目が大きく、スマートな成魚とは似てもいません。太平洋海域において、ネットで採集した稚魚は西部熱帯水域に多く、主要な産卵場であることを示しています。



西太平洋カツオの回遊



カツオは暖水域に分布し、大回遊をする魚です。稚魚時代は産卵場付近の熱帯水域で過ごし、2歳魚になると餌生物の多い北方の温帯水域へ回遊します。

太平洋には西と東で異なった系統群があり、日本が主に漁獲しているのは西部太平洋系です。日本近海へは熱帯水域から小笠原諸島付近を経て5・6月頃伊豆～房総近海へ来遊する群と、3・4月頃沖縄近海から四国・紀州沖を経て来遊する群があります。これらのカツオ群は7・8月には餌となる小魚類、オキアミなどの豊富な常磐・三陸沖へと移動します。このようにして東北海域は竿釣りやまき網の好漁場となりますが、ここまで回遊するカツオの大部分は2歳魚です。3歳魚の一部は東北海域へも回遊しますが、大部分は小笠原近海までで、4歳魚以上の高齢魚は熱帯水域に残ります。

秋になって海水温が低下するとともに、東北海域から南下するカツオを「下りカツオ、戻りカツオ、餅カツオ」などと言い、脂肪が乗って刺し身として大変美味です。



木付き



パヤオ(人工浮遊物)

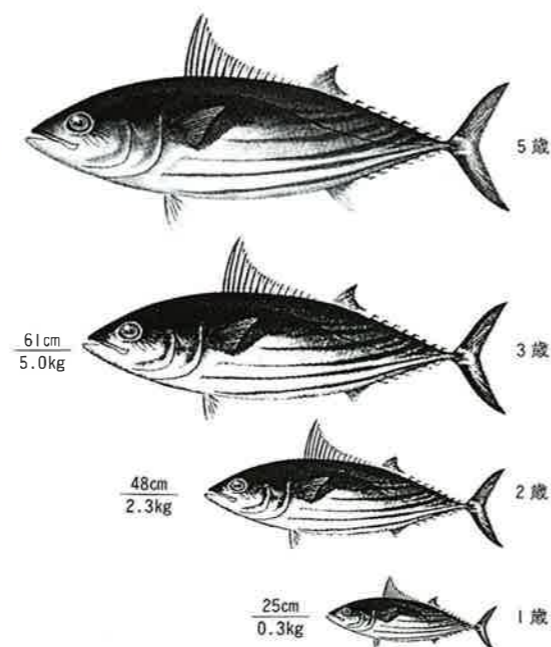
日本人とカツオの関わり

カツオと日本人の関わりは縄文時代の遺跡に見ることができます。中世になると万葉集に堅魚(カツオ)の話が、大宝令などには供物・貢物としてカツオが多く登場します。当時は輸送・貯蔵の点から流通は干魚が主体で、堅魚-カツオの名もそれに由来しています。また、神社に飾られた堅魚木は、民族の伝統と信仰を物語っています。

鎌倉時代には武家社会で、江戸時代では庶民も大いに賞味し、江戸っ子気質を代表する季節の魚として、俳句にも多く読まれています。

昭和の時代になると、かつお節として広く利用されましたが、生鮮魚の利用は限られていました。しかし、昭和50年代に南方漁場の開発による漁獲量の増大や、冷凍技術の発達によって、現在は周年生食で利用されるようになり、消費量が增大しています。

カツオの年齢と成長



カツオは集群性の強い魚で、漁業者は群れの性状によって次のように呼んでいます。

鳥付き：カツオに追われた小魚を狙って群がる海鳥の下にいるカツオ群。

鮫付き・鯨付き：ジンベエザメ・マッコウクジラなどと行動を共にするカツオ群。

木付き：流木などの下に集まるカツオ群。

素群れ：カツオだけで遊泳する群で、スナムラとも言います。

